ドイツ教養小説について

林　　久博

1．はじめに

ドイツ文学史において、「教養小説（Bildungsroman）」という術語は不可欠なものであり、ドイツ文学の本質的特徴に関連するものであると考えられてきた[1]。一般的に教養小説とは主人公の人格形成を主題とする物語であると考えられているが、このジャンルは明確に確定しがたく、研究者の間でも意見が分かれている。また「教養小説」という概念を使用すること自体、疑問の対象となっている。例えば、フリッツ・マルティーニは「教養小説をひとつの小説形式として規定することの問題性は、教養小説、発展小説（Entwicklungsroman）、または教育小説（Erziehungsroman）という曖昧な諸概念のありふれた結合にもっとも明らかとなる」[2]と述べている。確かに、教養小説というジャンルの使用は問題的である。小説をある特定のジャンルに組み入れ、そのジャンルに固有の名称を与えることは、必ずしも意義深い作業ではない。なぜなら、すぐれた芸術作品であれば一定の枠（ジャンル）に収まりきれない要素を持っているからであり、小説を一つのジャンルに当てはめることは、読者に先入観を与え、その作品の解釈を固定化、狭隘化してしまう恐れがあるからである。

それにもかかわらず、今日に至るまで教養小説について多くの書物が書かれ、論じられてきた。トーマス・マンの『魔の山』（1924年）をはじめとして、作家たちは自分の作品を教養小説に仕立てようとし、研究者たちも教養小説についての議論を重ねてきた。一般読者にも、教養小説というジャンルは好んで受け入れられてきた。これにはもちろん様々な理由が考えられる。教養小説は、主人公の人間形成の始まりからある程度の完成の段階までを描いているので、分量としては比較的長くなるが、だからこそ読者は長い間主人公と歩みをともにするわけであ

り、その結果、主人公が形成されると同時に、読者も教化されるところが多いからである。また、教養小説の主人公たちが意識しているかいないかにかかわらず、探し求めているものは「いかに生きるべきか」という問いに対する答えであり、この問いにこだわりつづける読者が少なからず存在しているからである。

本論では、「教養小説」という概念についてこれまでどのような議論が行われてきたのかを問題にしつつ、この文学ジャンルについての筆者の見解を述べてゆくことにする。

2.「教養小説」という術語の成立

「教養小説」という文学ジャンルを最初に用いたのは、これまで哲学者ディルタイ（1833-1911）だと考えられてきたが、フリッツ・マルティーニの調査によると、彼が最初ではなく、エストニアのドルパルト大学教授カール・フォン・モルゲンシュテルン（1770-1852）である[3]。しかし、ディルタイの教養小説定義は極めて重要なものであり、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』（1795/96年）を教養小説の典型と見做すようになった今日の傾向は、彼によって作り出されたと言える。

ディルタイは『シュライエルマッハーの生涯』（1870年）の中で、『ヴィルヘルム・マイスター』が「さまざまな段階、さまざまな形、さまざまな人生の時期における人間形成（menschliche Ausbildung）を示している」[4]と解説し、『ヴィルヘルム・マイスター』の流れを汲む作品を「教養小説」と名付けた。こうしたディルタイの解釈から、一般的に『ヴィルヘルム・マイスター』は教養小説と見做されるようになったのである。さらに彼は『体験と創作』（1905年）のヘルダーリンを扱った章の中で、フィールディングの『トム・ジョーンズ』のような伝記的小説とは異なる教養小説の独自性を次のように簡潔に定義している。

> 青年は幸福な薄明のうちに人生に踏み入り、自分に近い魂を求めて、友情と恋愛に遭遇する。しかし、やがて世間の厳しい現実と闘わざるをえなくなり、こうしてさまざまな人生経験を積んで次第に成熟し、自分自身を見出し、世

界における自分の使命を自覚するようになる[5]。

このようなディルタイの教養小説定義が今日の教養小説観につながっているのは間違いなく、これが教養小説の最大公約数的定義と言っていいだろう。

3．これまでの教養小説研究

さてこれから、教養小説についてどのような議論が研究者の間でなされてきたのか具体的に紹介していきたいと思う。とはいえ、教養小説に関する文献はきわめて膨大であるので、すべてを網羅することは困難である。それ故に、教養小説研究において引き合いに出されることの多いローター・ケーンの研究報告『発展小説と教養小説』で紹介されている文献を参考にしつつ、本論を進めてゆくことにする。

ところで、以下に紹介する研究者の論考においては、おおよそ「教養小説」と「発展小説」の概念上の相違が問題とされているが、この二つと似た意味で使われている「教育小説」は、どの文献においても考察の対象から除外されている。なぜならば、「教育（Erziehung）」とは「教育学（Pädagogik）」において、若者の成長における外面的影響を意味しており、教養小説や発展小説が教育小説と同じく人間の成長を描くにしても、教育小説では個の自発性などは問題にされておらず、教養小説や発展小説における個の成長の捉え方とは明らかに異なるからである。それ故に、本論でも教育小説は考察の対象外とする。

さて、ケーンの研究報告の中で最も重要視され利用されているのが、メリッタ・ゲルハルト著『ゲーテの「ヴィルヘルム・マイスター」に至るまでのドイツ発展小説』である。ゲルハルトの論考を要約してみよう。ゲルハルトによると、発展小説は「既存の世界の統一的な生の形式が、すでにその最高の力と義務を失い始めたとき」[6]に生まれる。つまり時代が弱体化しているときに生まれるということである。そこで発展小説は「支配的な文化形式に対して最初の疑念と疎外が起こったとき」に現れ、再び「生の統一が生じ、新しい規則と共同体の教養への憧憬が充たされた」[7]ときに衰退する。ゲルハルトによると「発展小説」は「個人

のそのときどきに向けられている世界との対決、およびその個人の徐々の成熟と世界への同化という問題を主題にしているような物語作品すべてであって、その道程の前提と目標の如何は問わない」[8]。それに対して「教養小説」は、歴史的な観点から「ゲーテとゲーテ以後の時代の作品」[9]として捉えられ、そこでは個人の発展が「秩序の解体と規範の動揺の時代」[10]を背景にした新たに解決されるべき課題、つまり「自分の生に目標と形式を見出すという課題」[11]をめぐって展開される。

ゲルハルトは13世紀から18世紀までの「発展小説」を考察の対象とし、主に中世ドイツの代表的作家ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの『パルチヴァール』(1210年頃)、バロック時代の作家グリンメルスハウゼンの『ジンプリツィシムスの冒険』(1669年)、啓蒙主義時代の作家クリストフ・マルティン・ヴィーラントの『アーガトン物語』(1766/67年) を扱っている。ゲルハルトはこれらの作品を「発展小説」と位置付け、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』という「教養小説」と区別している。パルツィヴァール、ジンプリツィシムス、そしてアーガトンという各作品の主人公が、それぞれ違いがあるにしても、ともに見えないところで使命を課されており、目標が確定されているのに対して、ヴィルヘルム・マイスターに至っては「自分の生に目標と形式を見出すという課題」が問題とされる。つまり、そこでは目指す目標の有無が「発展小説」と「教養小説」を区別する決定的な要因となっているのである。

教養小説は、歴史的に見て、どのように成立したのか。この疑問に対してE. L. シュタールは、きわめて示唆に富む研究報告を行っている。彼の著作『宗教的教養理念と人文主義哲学的教養理念』の概要を以下に述べることにする。

シュタールはまず「教養 (bilden, Bildung)」という言葉の詳細な研究を行っている。bilden という言葉は、ラテン語の formare の翻訳語である。この formare という語は、「神との同一化への発展」[12]を意味しており、bilden には本来、宗教的意味が付与されていたのである。(ただし、bilden という語は、中世以前からも gestalten や formen という意味でも使用されており、陶工や金細工師やパン職人によっても使われていた)。この宗教的な意味が付与された「教養」を、シュタールは「宗教的教養理念 (religiöse Bildungsidee)」と呼び、この理念を

「直接的に神の恩寵によって、もしくは間接的に秘跡（特に聖餐式）の媒介によって生じた、人間における神の似姿への回復」[13]と定義づける。しかし、18世紀になると「教養」という語に、新しい意味が加わる。疾風怒濤期や古典主義時代の詩人・哲学者たちは、この語に「人間に与えられた資質の拡張」[14]という意味を見るようになった。これをシュタールは「人文主義哲学的教養理念(humanitätsphilosophische Bildungsidee)」と名付けている。前者の教養理念には「キリスト模倣（Nachahmung Christi)」「慈悲の仲介（Gnadenvermittlung)」「彼岸志向（Jenseitsstreben)」が含まれていたが、後者では「全体へと向かう衝動（Totalitätsdrang)」「個人主義（Individualismus)」「この世での実現(Diesseitserfüllung)」という意味が付け加わり、前者に取って代るのである。このような教養という語の意味変化に従って教養小説が生まれたのである。またシュタールは次のように教養小説の成立事情を説明している。

> 18世紀には二つの領域が確認されており、その領域においてBildungという言葉は特に頻繁に用いられている。その一つは敬虔主義の宗教的領域であり、それから人文主義哲学の、教育的、心理学的、また自然科学的な方面に向けられた領域である。この二つの領域から教養小説は生まれた。しかも、私たちが知っているような教養小説が成立しうる前に、宗教的な教養思想は、人文主義的教養理念の意味において修正されねばならなかった。宗教的な教養思想から人文主義哲学的な教養思想への変化から、理念の複合が生まれ、その理念の複合が教養小説への道を見出す［…］のである。形式的な面から見れば、ドイツ教養小説には二つの起源がある。ひとつは宗教的告白書と「新たに」「復活した」人間の自伝的手記であって、もうひとつは［…］ドイツでも度々親しまれていた冒険小説であり、これらは今や教養小説へと深化されている。私たちは、教養小説において二つの流れが合流しているというドイツ教養小説の起源について考えなければならない。宗教的告白書からは、教養の理念が、また思考の理念が、生成の型が受け継がれ、冒険小説からは、事件、物語の素材的要素が受け継がれた。その場合、教養の理念が単に冒険小説に入り込んで、教養小説の根源が「宗教的告白書＋冒険小説＝教養小説」

というように公式化されうるのではない。宗教的告白書ならびに冒険小説が共に変容したあとで初めて教養小説が生まれたということを忘れてはならない。宗教的告白書においては世俗化と主体化（宗教の客観性を主観的に捉えること—筆者注）のプロセスを通じて、冒険小説においては内面化と心理学化のプロセスを通じて、教養小説は生まれたのである。[…] 宗教的イデオロギーが冒険小説の中にときおり現れてくるようになり、宗教的要素が、一種の人間形成という傾向を冒険小説へもたらすようになる[15]。

さて次にボルヒェルトの見解を紹介しよう。彼は『ドイツ教養小説』において、教養小説というドイツ文学の独自形式にとって決定的な要因としてゲーテ時代の教養理念を挙げ、教養小説の存在はこの理念の有無にあるとした[16]。また彼は『レアルレキシコン』の「教養小説」の項目においては、18世紀の個人主義文化における人格の発展の描写というディルタイの前提が、それ以後の時代の小説では個人と共同体の均衡となって、もはや有効性を喪失したために、発展小説という概念が導入されたのだと論じている[17]。

またトゥワイヨンによれば、教養小説の主人公は「限定された目標に向かってただ一面的に教育されることなく、全面的に人格形成され、生の諸々の大きな力がこの人格形成に寄与することになる。生を自然科学的に洞察することが一般化すればするほど、発展という概念が強く普及する。教養小説の主人公の意識的な影響に自然法則に沿った事件が入り込み、教養小説から発展小説が生まれる」[18]。

以上、主な研究者による「教養小説」の概念規定を列挙してきたが、ケーン自身は教養小説と発展小説の違いをどのように理解しているのであろうか。彼は次のように教養小説を定義している。「（ドイツ）教養小説はゲーテとその同時代人の成果であり、いずれにしても、それ以前には、内容的にも形姿においても厳密に比較しうる小説は見出せない」[19]。これはゲルハルトの見解に負うものであり、発展小説の場合にも、ケーンはそれを「いわば超歴史的な構成類型（ein quasi-überhistorischer Aufbautypus）」[20]と見做している。

これまでいくつかの過去の研究を概観してきたが、教養小説の問題性を解明するに際して筆者が特に興味を引かれたのは、メリッタ・ゲルハルトとE. L. シュ

タールの論考である。前者を重要視すべきだと考える理由は次章で述べる。後者については、「宗教的告白書」と「冒険小説」の結びつきと変容によって教養小説が生まれたという形式的な面からの解説が、いままでにない新しい観点であり、極めて示唆に富んでいるからである。

4．教養小説における作品構造と歴史的背景

本章ではまずはじめに教養小説の作品構造について論じることにする。教養小説には、『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』をはじめとして、ノヴァーリスの『青い花』(1802年)、シュティフターの『晩夏』(1857年)、ケラーの『緑のハインリヒ』(初稿1854-55年／第2稿1879-80年)、トーマス・マンの『魔の山』という系譜が存在する。この系譜を概観すると、上記の作品に共通しているのは、メリッタ・ゲルハルトが指摘したように、「自分の生に目標と形式を見出すという課題」が主人公に与えられているということである。もちろん、主人公にこうした使命が課されている小説すべてが、教養小説というわけではない。どの小説においても、このような課題は多かれ少なかれ課されているからである。教養小説と、その他のこれに類似したテーマを持つ作品との相違は、以下のような作品構成に認められる。まず、教養小説の主人公は自己の Bildung を必要としていなければならない。それは前提として、主人公がまだ未成熟な状態であるということを意味している。こうした主人公がまず教養小説には不可欠である。次に教養小説の構造として

1．空想力が最も効果的に示されながら、無自覚な人間が自覚的な人間へと発展してゆく青年時代
2．恋愛や友情に遭遇し、危機に直面し、過ちを犯しながら遍歴する時代

という段階が設定されている[21]。「自分の生に形式と目標を見出すという課題」と、上に挙げた作品構造を持つ小説を教養小説と呼んでいいだろう。

さて、このようにひとまず教養小説というジャンルを特徴づけてみたが、次に

注目すべき点は、メリッタ・ゲルハルトが指摘したように、この文学ジャンルが歴史的な産物だということである。なぜならば「自分の生に形式と目標を見出すという課題」は近代から始まったものだからである。

その課題が求められていなかった時代、それは外部の力によって「目標と形式」が与えられていた時代ということになるが、まさにそれは中世の封建社会であると言ってよい。中世の封建社会では、人はだれでも社会的秩序の中で自分の役割へつながれていた。社会的に見ても、一つの階級から他の階級へ移るような機会はほとんどなく、規則や義務に縛られ、個人が自由に活動する余地はなかった。しかし近代的な意味での自由はなかったが、中世の人間は孤独ではなく、孤立していなかった。生まれたときからすでに明確な固定した地位が与えられ、人間は全体の構造の中に根を下ろしていた。社会的秩序は自然的秩序と考えられ、社会的秩序の中ではっきりした役割を果たせば、安定感と帰属感が与えられた。このような状況においては、自分の生に目標と形式を見出すことは必要のないことであったであろう。しかし、資本主義の台頭に伴い、人々の心理的雰囲気にも変化が起こる。近代的な意味での時間概念が発達し、時間が価値あるものとなった。ニュルンベルクの時計も十五分ごとに鐘を打つようになった。人々には教会の制度が経済的に非生産的なものに思われ、能率という概念が高い道徳的な価値の一つと考えられるようになった。資本主義は人間を中世社会の共同的組織から解放し、自分自身の足で立って、自らの運命を試みることを可能にした。人間は自己の運命の主人となり、危険も勝利も自己に委ねられた。個人の努力によって成功することも経済的に独立することも可能になった。こうして個人はかつての束縛から自由になったのである[22]。

中世の封建社会の桎梏から解放されることによって、このような近代的な個人的自我が生まれた。しかし人々は諸々の封建的な関係のくびきを断ち切った瞬間に帰属すべき社会そのものを失い、それ故に自分の力で、自分の生に「目標と形式」を見つけなければならなくなる。

しかし、自分の生に「目標と形式」を見出すこと（つまり、自分は何のために生きていて、どのような生き方をすればよいかを認識すること）は、簡単なことではない。いやそれどころか、これは我々にとって永遠の課題であると言ってよい

だろう。また、その際に考えなくてはならないのは「社会」との関連である。人は社会的な存在であるが故に、社会の中で「自分の目標と形式」を見出さなくてはならない。ここで問題が生じる。「自分の願う形式と目標」が必ずしも「社会」に受け入れられるとは限らないのである。文学作品に具体的な例を求めると、『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』では、主人公ヴィルヘルムの願う「調和的人格形成」は「一面化の時代」では受け入れられず、『緑のハインリヒ』の主人公ハインリヒ・レーは画家を目指してスイスの田舎から大都会ミュンヒェンへ赴くが、才能が認められない。

「個人の目標」と「社会」の乖離を調停することは、極めて困難である。それ故に、多くの教養小説は、途中で終わるか、未完成に終わっている。とはいえ、『晩夏』の主人公ハインリヒ・ドレンドルフのように社会との関係を絶ち、閉ざされた空間で、優れた指導者に教えを乞い、経済的に不自由しない生活をしていれば、自分の目標を達成できるのかもしれないが。

いずれにしても、近代的自我の獲得が人間に与えた影響は大きく、それによって個人は孤立し、自らの存在の意義を求めてさまようことになる。近代的自我の行方を模索すること、これが近代の小説の中心的なテーマだが、それを主人公の長い生涯を辿ることによって追求したものが教養小説であると言うことができるであろう。

5．教養小説の結末部の問題

さて、これまでの論究で教養小説の成立過程が多少なりとも明らかにされたと思うが、最後に問題としたいのは、先程少し触れた教養小説の結末部についてである。教養小説の系譜を概観すると、その結末部は二つに分かれることが確認できる。ひとつは、『晩夏』に顕著であるが、自我と世界の間の葛藤の調和的な解決であり、この解決はユートピアという要素を含んでいる。もうひとつは、『緑のハインリヒ』に代表される自我と世界の間の調和的解決の不可能性を際立たせるものである。そのような小説には「自己制約」や「諦念」が不可避なこととして強調されており、ユートピア的な自己形成の目的の実現を保留つきでしか叙述

できていない。

しかし、現実にはユートピアは存在しがたいが故に、後者の結末で終わることがほとんどである。破綻なしの結末に終わる『晩夏』はある意味例外で、シュティフターによって現実世界の「惨めな頽廃」[23]に対するユートピアとして構想されたにすぎない。つまり、現実の世界ではハインリヒ・ドレンドルフのような生き方は許されないのである。それ故に、教養小説には概して保留の多い婉曲的な叙述や表現が際立つことになる。ゾルクも次のように述べている。「教養小説はその根本的なテーマを未解決で未完の議論としてしか扱うことができない。このような議論は、それらのテーマが問題という形でのみ捉えうるのであり、それには納得のゆく解決が存在しないことを証拠立てている」[24]。それにもかかわらず、作家たちはそれぞれの方法で、「私」として孤立した自我と現実世界の間の抽象的な対立を乗り越え、揚棄しようと試みる。これが教養小説の最大の目標である。だが、この対立を克服することは容易なことではない。それ故に、なんとかしてこの対立を乗り越えようとする教養小説の結末部には、メルヒェン的な不自然さや偶然性という、作者の意図的な操作が加えられることになる。ヴォルフガング・カイザーもこの点に関して「教養小説はなんとなく人工的な感じがする」[25]と述べている。確かに、教養小説においてストーリーの人工性は存在する。それは例えば、『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』におけるヴィルヘルムとナターリエの突然の結婚、そして『緑のハインリヒ』の第2稿におけるハインリヒとユーディットの再会に認めることができる。ロイ・パスカルは、教養小説におけるストーリーの人工性は「登場人物や事件がそれ自体の権利において存在するというよりも、単なる意味の運び手として描かれているという事実による」[26]ものだと考えている。つまりそれは、作者が理念を提示しようとするあまり小説のストーリー展開が重要視されなくなるということであり、その結果、ストーリーの人工性や不自然さが強調されるということである。このロイ・パスカルの見解は正しい。なぜなら、教養小説の結末部には理念が提示されているが、リアルな現実が提示されていないように思われるからである。

その結末部が問題を孕んでいることからも明らかなように、教養小説はそもそもその成立時から破綻すれすれのジャンルなのである。しかし、そのジャンルの

不完全さが指摘されても、教養小説が否定的に語られるべきではない。むしろ教養小説が提示するテーマは、現代の孕む問題であって、私たちの問題そのものであるからである。社会が分解し、その構成員である一人一人が孤独となって以来、個の独自性がいまだに問われつづけているのだから。

注

(1) 「教養小説」という文学ジャンルが一般的に広まるようになったきっかけは、明らかにトーマス・マンに拠るところが大きく、マンは何度もこのジャンルについて言及している。マンは教養小説という文学形式が同時に「自叙伝」であり「告白」であって、当時、文学の領域におけるデモクラシー化の形で台頭してきた「社会小説」に対抗するものとして、まさしくドイツ的であり、内面性に立脚したドイツ国民の精神にふさわしいものであったと考えている。(Mann, Thomas: Geist und Wesen der deutschen Republik. In: Gesammelte Werke. Bd. XI, Frankfurt am Main 1990, S. 854.) 確かに、教養小説は人間の内的成長を描くものなので、トーマス・マンの言うように、教養小説はドイツ人の特性である「内面性」を表現するのに最適な小説形式であったと言えよう。それ故に、とりわけドイツで教養小説が生まれる下地があったのである。しかしながら、なぜドイツに「内面性」が生まれる精神的下地があったのだろうか。これに対してマンは『ドイツとドイツ人』(1945年) の中で、歴史的にドイツがあらゆる革命に失敗していることにその原因を求めている。革命の挫折ゆえにドイツは「国民」という概念を「自由」という概念に結びつけることができず、市民階級の間に精神的自由と政治的自由との背馳という二元論が生まれたのである。こうして市民階級の間に非政治的な内面性が養われていったのだとマンは考察している。(Mann, Thomas: Deutschland und die Deutschen. In: Gesammelte Werke. Bd. XI, Frankfurt am Main 1990, S. 1137ff.)

(2) Martini, Fritz: Der Bildungsroman. Zur Geschichte des Wortes und der Theorie. In: DVjs 35 (1961), S. 62.

(3) Ebd. S. 45.

(4) Dilthey, Wilhelm: Das Leben Schleiermachers. In: Gesammelte Schriften Bd. XIII, Göttingen 1979, S. 299.

(5) Dilthey, Wilhelm: Das Erlebnis und die Dichtung. Leipzig/Berlin 1929, S.393f.

(6) Gerhard, Melitta: Der deutsche Entwicklungsroman bis zu Goethes „Wilhelm Meister". Halle/Saale 1926, S. 167f.

(7) Ebd. S. 169.

(8) Ebd. S. 1.

(9) Ebd.

(10) Ebd. S. 160.

(11) Ebd.

(12) E. L. Stahl: Die religiöse und die humanitätsphilosophische Bildungsidee und die Entstehung des deutschen Bildungsromans im 18. Jahrhundert. Bern 1934, S. 8.

(13) Ebd. S. 52.

(14) Ebd. S. 9.

(15) Ebd. S. 118f.

(16) Borcherdt, Hans Heinrich: Der deutsche Bildungsroman. In: Von deutscher Art in Sprache und Dichtung. Hrsg. v. G. Fricke, F. Koch u. K. Lugowski. Bd. 5, Stuttgart/Berlin 1941. S. 3ff.

(17) Borcherdt, Hans Heinrich: Artikel „Bildungsroman". In: Reallexikon der deutschen Literaturgeschichte. 2. Aufl. Hrsg. v. W. Kohlschmidt u. W. Mohr. Bd. 1, Berlin 1958, S. 176.

(18) Touaillon, Christian: Artikel „Bildungsroman". In: Reallexikon der deutschen Literaturgeschichte. Hrsg. v. P. Merker und W. Stammler. Bd. 1, Berlin 1925/1926, S. 141f.

(19) Köhn, Lothar: Entwicklungs- und Bildungsroman. Ein Forschungsbericht. In: DVjs 42 (1968), S. 434f.

(20) Ebd.

(21) In: Borcherdt (Anm. 17), S. 177.

(22) エーリッヒ・フロム：『自由からの逃走』(日高六郎訳)、現代社会科学叢書、1997年、52～153頁

(23) Stifter an G. Heckenast vom 11. 2. 1858. In: Adalbert Stifter. Briefe. Hrsg. v. H. Schumacher. Zürich 1947, S. 281.

(24) Sorg, Klaus-Dieter: Gebrochene Teleologie. Studien zum Bildungsroman von Goethe bis Thomas Mann. Heidelberg 1983, S. 8.

(25) Kayser, Wolfgang: Entstehung und Krise des modernen Romans. Stuttgart 1954, S. 25.

(26) Pascal, Roy: The German Novels. Manchester 1956, S. 304.

（はやし　ひさひろ　独文学）